

日本の国立大学は、平成16年4月から国立大学法人となり、大学の仕組みが大きく変わりました。名古屋大学は、このような国立大学をめぐる状況の変化をいち早く受けとめ、21世紀の国際社会における本学の教育、研究、人材育成について、全学をあげて真剣に議論をし、平成12年2月に「名古屋大学学術憲章」を制定しました。

そして、名古屋大学は研究面における拠点大学であると同時に、教養教育の重点大学とすることを社会に公表しました。「学術憲章」では、自発性を重視する教育実践によって、論理的思考力と想像力に富んだ勇気ある知識人を育てることを基本目標の一つとして掲げています。

この方針の下に、平成6年4月から実施されてきた学部四年一貫教育（医学部医学科は六年一貫教育。）、全学共通教育の教育体制を刷新する教育改革に取り組み、平成13年12月に教養教育院を起ち上げ、平成15年4月から新しい教育体制の下で教養教育を実施することとなりました。

「全学教育」とは、名古屋大学学術憲章が定めるところの本学の学生に相応しい基礎教育及び教養教育を目標とし、その内容と実施について全学で責任を負う教育をいいます。

この新しい全学教育体制は従来の学部四年一貫教育、全学共通教育の成果を継承し、総合大学、基幹大学である本学のメリットを十二分に生かし、初年次から本学の全教員が責任をもって教育を担当し、めざましい教育効果をあげていくことを目指した教育システムです。

大学の教育には、数学や理科のように高校までの教育との連続性が比較的強い分野もありますが、ものの見方や考え方が高校までとはある程度異なる分野があることは否定できません。そこで全学教育においては大学に入学した学生諸君の大学教育への導入を目的として全学基礎科目・基礎セミナーや文系・理系の基礎科目を用意し、大学で勉強する学問についての基礎的な学力を身につけたうえで、より幅広い学識の養成を目的とした教育科目を履修することとしています。この基礎科目には、学生諸君の専門科目に直結した科目と隣接分野の科目とが含まれています。また、教養科目には、文系・理系いずれの学生にも必要な知識教養の涵養を目的とした全学教養科目をはじめとして、文系・理系に亘る教養科目があります。文系学生に理系科目、理系学生に文系科目の履修を義務付けるいわゆる「たすきがけ」教育を実施して、より複眼的、総合的判断能力が身につくよう配慮しています。

さらに、国際化への対応も「全学教育」の重要なテーマです。外国語を文化とともに学ぶことによって、この目的を達成しようとしています。これが、全学基礎科目・言語文化です。この全学基礎科目には、現代社会における生涯健康とスポーツに関する基本的知識と実践的能力の涵養を目的とする健康・スポーツ科学が含まれています。

この「全学教育科目履修の手引 STUDENTS' GUIDE」は、本学の学生が全学教育科目を履修するにあたり、あらかじめ知っておかなければならない学修上の注意事項をまとめたものです。皆さんは本冊子をよく読むとともに、入学当初に開催する「学部ガイダンス」にも必ず出席して、間違いのないように、しかも自立的、自発的に賢明に授業計画を立ててください。皆さんが授業計画を立てるにあたって不明点や疑問点があれば、所属学部の教務担当窓口または教養教育院事務室に問い合わせてください。また、指導教員（クラス担任）も皆さんの様々な疑問に応じてくれますから、遠慮なく訪問するようにしてください。

学生の皆さんは、教務システム（名古屋大学ポータル (<https://portal.nagoya-u.ac.jp/>) の「授業・研修」タブ内の「学務」からログイン）に掲載している「シラバス」を十分に活用するようにしてください。授業の情報を「シラバス」として学生に予め提供するのは、学生自身の主体性と学ぶ意欲が最も重要であると考えているからです。全学基礎科目（基礎セミナー、言語文化、健康・スポーツ科学）、文系基礎科目、理系基礎科目、文系教養科目、理系教養科目、全学教養科目、開放科目などの履修は、学生の自律的な選択に大幅に委ねられており、事前情報がなければ、学生自らの選択権を生かすことができません。必修性の高い科目であっても、担当教員、授業のねらいと内容、成績評価の方法、教科書・参考書などを予め知ることにより、計画的に予習し、熱心に勉学に取り組むことが